

死を生きる

——辞世の日本文学——

坂野信彦

あるひとびとには、死は突如としておとずれる。またあるひとびとには、目前にさしせまった死が宣告される。さらに、ある一部のひとびとは、自分の死の時期と死因とをみずからに選びとる。

目前に具体的に自分の死がせまったとき、ひとはみずからの死を意識的に生きはじめるといえる。そのとき、死は生の最大の内幕となる。このばあい、「死」は当人の思想、信仰、人生観の集約された観念として、感性や行動を統御する。死を生きることには、ひとはみずからの実存を賭けるのである。

みずからの死をまえにして、古来、文芸にたずさわるひとたちは辞世の作品を遺してきた。辞世の作品——それは文字どおり最後をかざる作品であるとともに、生きてきたこの世への訣別のことばでもある。

そこには、おのれの人生にたいする感慨があり、死ののちのこの世（またはあの世）への思いがある。そこにはおのれから作者の人生観、世界観が反映する。

*

手始めに、神話時代の英雄、倭建命やまとたけるのみことをとりあげてみる。神話は、もちろん現実の事実そのままではない。しかしすくなくとも、それは現実の反映ではある。わたしたちは、神話のなかに古い時代のひとびとの心理をかいまみることができる。

倭建命は、その名の示すとおり、ほんらい強くただけしい性格の持ち主であった。けれども、物語の展開につれて、かならずしもそうではなくなってしまう。これは、倭建命が「貴種」として流離することになるからだと思われる。非常にすぐれた貴い人がへんぴな地方をわたり歩く、というパターンが日本の物語にはさかんに繰り返されてきた。折口信夫はこれを「貴種流離譚」と名づけた。このパターンにおいて、流離する貴人は単独ではむしろたいへん無力の人とされる。伝説上の源義経にはそれが典型的にあらわれている。貴種流離譚では、その無力な貴人をささえる庇護者の存在がみとめられる。義経には、いうまでもなく弁慶がつきそっていた。では、倭建命のばあいはだれが庇護者であったのか。お婆の倭媛とも考えられるが、この媛は伊勢神宮にいて、行動をともしたわけではない。行動をともしたのは、じつは一本の剣——「草なぎの剣」であった。この剣には霊的な威力がこもっていた。この剣を新妻のもとに置いてきてしまった命は、もはや何の能力もなくなつて病みおとろえ、死んでしまう。

死ぬ直前にうたったという歌。

をとめの 床の辺に我が置きし つるぎの太刀 その太刀はや

この「太刀」（草なぎの劍）は、命の守護靈であつた。死を目前にして、みずからの守護靈に万感の思いをこめて、歌を詠んだわけである。

英雄倭建命は、靈的な世界に生きていた。靈の加護を得て活躍し、靈の加護をうしなつてあつけなく死んだ。命は死後、白い大きな千鳥となつて天へ舞いのぼつて行つた。

二四歳にして謀反のかどで処刑された大津皇子。

ももづたふ磐余いはねの池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

かぎりなく遠くまで伝いわたる、磐余の池に鳴いている靈鳥の鴨。それを見おさめとして見ながら、今日かぎりのいのちと死後のゆくえを思つて詠嘆している。

臨終

金鳥臨西舎

鼓聲催短命

泉路無賓主

此夕離家向

死出の旅路には客も主人もなく、自分ひとりきりだ。この夕べに、私は家を離れて黄泉よみの国へむかおうとしている。

詩と歌をあわせて読むと、いっそう真実味がでてくる。ここでは、死後における靈魂の存続——靈魂の

不滅——が当然のこととして信じられている。死後への思いがこれらの詩歌に切実さをもたらしている。古代における辞世の詩歌として、もつともきわだったものといえよう。

いきなり近代に移る。近代の俳句、短歌の草分け的存在となった正岡子規。不治の病におかされ、病床で身動きもできない苦痛のなかで、子規は文筆活動をつづけた。いつ死ぬかわからない。死ぬことは運命だからそれでいいとして、いつ死ぬかわからないのは困る。あと三カ月の命でも医者に言われれば、それなりにいろいろぜいたくもいえるのに——などと書いている。また、悟りというのは、いかなるばあいでも平気で死ぬことかと思っていたが、そうではない。悟りというのは、いかなるばあいにも平気で生きていることであつた、とも書いている。「病氣を楽しむ」という言いかたもしている。

死ぬときまでは生きなければならぬ。生きるのなら、ただ苦しむだけでは生きる価値がない。病氣であること、苦しむこと、それじたいを楽しむという境地にならなければならぬ。子規はそういう境地にまで達していた。そういう境地に達しなければ生きてゆけなかつたのであろう。

絶筆となつたのは、三句の俳句である。

糸瓜へちま咲て痰のつまりし佛かな

痰一斗糸瓜の水も間に合はず

をと、ひのへちまの水も取らざりき

自分の死をたんとみつけている。子規はまぎれもなく「近代人」であつた。病床にあつて日常的に

目にふれ耳にきこえるものが存在のすべてであつた。子規という個人もそうした存在のひとつにすぎないのだつた。

小説家の有島武郎。『惜みなく愛は奪ふ』のなかで、武郎は人の生活を「習性的生活」「智的生活」「本能的な生活」の三つに分けている。そのうち彼は「本能的な生活」を最上位に置いた。本能的な生活においては、自己の必然の衝動によってすべてが統御される。そのもつとも純粹なあらわれが「愛」なのだ、という。外界を愛で同化してゆくことによつてのみ、自己は成長するのだ、という。

いわば本能的人間主義とでもよぶべき思想である。これが社会へむけられると、一種の無政府主義的な共産主義へとつながつてゆく。しかし、小説家である武郎じしんの実生活は、そうした思想の実践者とはいえないものであつた。そこに武郎の苦悩があつた。やがて小説もゆきづまる。

そこにあらわれたのが、『婦人公論』記者波多野秋子であつた。秋子はすでに人の妻であつた。いったんは双方とも交際を断つ決心をしたものの、けつきよくは逆にますます深入りしてしまふことになる。愛の絶頂で死にたいという理想が、二人には共通していたのである。武郎はさきの『惜みなく愛は奪ふ』のなかで「愛が完うせられた時に死ぬ」と書いていた。そうしてとうとう、二人の情事を秋子の夫に知られてしまふ。このときから、二人は現実に死を思いはじめる。大正一二年六月八日、武郎と秋子は軽井沢へむかつた。

命絶つしもと苦くしあらば手にとりて世の見る前に我を打たまし

人格高潔な人道主義者有島武郎が、いま姦通罪を犯して世間のさらし者にされようとしている。「世の見る前に」彼は死なねばならなかった。

「私達は最も自由に歓喜して死を迎へるのです」「愛の前に死がかくまで無力なものだとは此瞬間まで思はなかつた」。遺書のなかに武郎はこう書き記している。ここにみられるのは、一種刹那的な情念である。この世で結ばれぬ二人なら死んであの世で一緒になろう、というのが正統的な心中というものであった。その相手でなければ無意味な心中であった。しかし近代人の心中には、あの世が欠落している。あの世の欠落した心中では、相手との心理的結びつきは二義的なものになる傾向がでてくる。武郎と秋子の心中は、まさにそういう心中であった。

宮沢賢治は、ほとんど無名のままに死んだ。賢治がもつとも熱心にとりくんでいた作品が、『銀河鉄道の夜』であった。彼の唯一の理解者というべき妹のトシが死んでから、彼はこの作品を書きはじめた。この物語は、主人公のジョバンニが銀河鉄道に乗って靈界を旅してくるというものである。クラスメイトのカンパネルラは、友人を助けようとして溺れ死んで、銀河鉄道に乗って天国へむかう。同じ列車にジョバンニが一種の幽体離脱をして乗りこんで、一緒に靈界を旅行する。その旅行によってジョバンニは人間的に成長する。人間の靈的な真実を知り、人間のほんとうの生きかた——みんなの幸せのために自分を犠牲にするという生きかた——を悟る。

ここには、靈的な観点からみた生と死のありかたがあますところなく表現されている。この物語こそ、

宮沢賢治一世一代の究極の作品であるといえる。

昭和八年九月、肺を病んでいた賢治の容態が急変する。辞世の短歌二首。

方十里稗貫ひえぬきのみかも稲熟れてみ祭三日そらはれわたる

病いぢきのゆるにもくちんいのちなりみのりに棄てればうれしからまし

「みのり」は穀物のみのりであるとともに、仏の道（仏法）のみのりでもある。詩のノートの中に、彼は「さびしく死して、さびしく生れん」と書いていた。転生して、またこの地上にもどってくることを信じて死んでいったにちがいない。

小説家高見順。詩人としても、とくに死をテーマとした作品を多く書きのこした。『わが埋葬』と題する詩集を刊行した年に、食道ガンを宣告された。以後、死にいたる二年間のあいだ、迫りくる死と直面しつつ日記を書き、詩を書きつづけた。死後に出版された詩集『重量喪失』の最後の作品は「川」という詩。

僕は大きくあふれたいと思ふ

僕は近く海へ入る

見たまへ

もう海は近い

死を生きる

海に落ちた水滴は

それが川からのものでも

もう区別はつかない

自分を失つて

海にのまれるのである

山から降りてきて海に入る前に

僕は陸に氾濫したい

死にゆく自分を「川」に見立てている。できることなら、陸にあふれて、陸地にあまねく遍在したい。「陸」、すなわち生きてきたこの世界への愛着が感じられる。「僕は陸に氾濫したい」——この最後の一行に、死へのぞむ作者の意気込みのようなものが感じとれる。高見順は、この世がすべてだとする近代人であった。その近代人が苦悩のはてに獲得するにいたった、これはせめてもの積極的な死後のイメージなのであった。

最後は小説家三島由紀夫。三島は、昭和四〇年からライフワーク『豊饒の海』を書きはじめる。その最

終原稿を出版社の人に渡したその日、昭和四五年一月二五日、陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地にて切腹。事実上、『豊饒の海』が辞世の作品となった。

『豊饒の海』は四部作。その全巻を輪廻転生という摂理がつかぬいている。第四巻『天人五襄』の巻末には、『豊饒の海』完。／昭和四十五年十一月二十五日」と記されている。「十一月二十五日」とはどういう日なのか。それは、吉田松陰の命日なのである。三島は、みずから吉田松陰の生れかわりだとひそかに信じていたようである。

三島には、死後に出版された『小説とは何か』という評論集がある。このなかで彼は、小説の世界と現実の世界のあいだでゆれうごく自分、ということを書いている。小説がひとつ完結するたびに、自己の存在が小説のなかに生きはじめ。そのとき現実の自分はほとんど存在感をうしなってしまう。『豊饒の海』の一卷ずつが完成するたびに、そういう事態がエスカレートしてゆく。四巻全部が完結したあとの自分というのは、もうとても考えることさえできない。そう記している。ライフワークの完結と同時に、生身の肉体は消滅してしまうほかなかったのである。

三島は生前、「私は太宰なんだよ」と語っていた。自分は太宰治とおなじなんだと言っているのである。太宰は自殺した。そのことで太宰の作品はいつそのががやきを加えた。三島もまた、そうした効果をひそかに計算していたのではないだろうか。

さらにいえば、三島の死も、じつは太宰と同じく中心だったのではないだろうか。ともに近代人としての心中である。ただし三島はいわゆる男色家であった。彼は、楯の会の隊長たる森田必勝と情死したので

ある。形式的には、壮絶な武士の自決であつたのだが。

益荒男がたばさむ太刀の鞘鳴りに幾年耐へて今日の初霜

この辞世の歌にも、三島のサムライとしての形式的な演技がみてとれる。彼は、近代的な精神をもちながら、「七生報国」という過去の儀式に殉じたのである。

*

おのれの死をどう生きるか。基本的に、これは大きくふたとおりに分かれる。すなわち、靈魂の不滅を信じて生きるのか、信じないで生きるのか、である。転生を信じて死をむかえる者にとっては、死はたんにひとつの区切りにすぎない。しかし、死んだらそれで終わりとは信じている者にとっては、死は完全な破局を意味する。(奇妙な)科学主義を信奉する近代人の多くは、後者の死を生きねばならなかった。そこにふかい苦悩があり、苦悩を克服する栄光があつた。